



# 監修の言葉

佐藤広美

▼東京家政学院大学助教

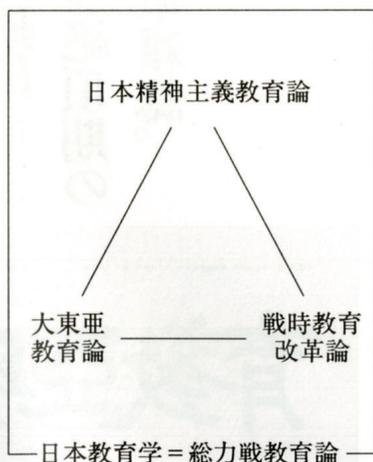
「大東亜共栄圏期」(一九四一年から一九四五年)、日本の教育学研究は日本教育学が主流となる。日本教育学は、国体論を基礎に、教育の目的・方法・内容をわが国固有の文化・歴史、すなわち日本精神によって基礎づけようとするものであった。一九三〇年代に生まれ、形成され、一九四一年以降、日本教育学界全体の中で主流を占めるまで膨張する。そして、四五年の敗戦において崩壊する。それが日本教育学であった。

大東亜共栄圏期は、教育学研究者すべてが積極的な報国行動を要求された。傍觀主義も自由主義も観念的態度も許されず、総力戦があたえる目標への転向を余儀なくされた。すなわち、日本教育学への雪崩をうった転向が生じたのである。

同時に、この時期は、日本帝国主義によるアジア諸民族の教育支配がもつとも拡大した時であり、アジア侵略教育論の横行期であった。大東亜教育論の登場である。植民地行政官僚と国内の教育学者が協力連携をはかり、大東亜教育論を形作った。

大東亜共栄圏期における日本教育学の構図は、以下のようになる。

日本教育学は、日本精神主義教育論が主軸となり大東亜教育論と戦時教育改革論を抱え込み、相互に矛盾をはらみながらも強力なトライアングルを構成する。その実質は総力戦を勝ち抜くための総力戦教育論であった。



本資料集は、このトライアングルをみごとに示している。そして、特に、大東亜教育論がもつとも多く掲載されている。本パンフレット掲載の「特集」や「座談会」「諸論文」を見ていただきたい。

## 『興亜教育』 内容一覧 (抜粋)

### ■ 特輯

- 大東亜建設の諸問題 (第1巻第5号)
- 科学教育の革新ほか (1巻6号)
- 歴史の諸問題 (1巻7号)
- 教育と思想 (3巻4号)
- 軍隊と学校 (3巻6号)
- 学校と工場 (3巻7号)
- 決戦文教政策 (3巻9号)
- 学徒勤労の問題 (3巻10号)
- 行学一体 (3巻11号)
- 新学校形態論 (4巻1号)
- 工場教育化 (4巻6号)
- 教育の戦力化 (4巻3号)

### ■ 座談会

- 興亜教育座談会 (1巻1号)
- 南方共栄圏の教育 (1巻3号)
- 東印度の教育 (1巻4号)
- 北守の拠点 蒙疆の全貌を語る (1巻5号)
- 科学教育の革新 (1巻6号)
- 新歴史の誕生と歴史教育 (1巻7号)
- 興亜教育を語る (1巻9号)
- 祖国と女性 (1巻10号)
- 興亜教師論 (1巻11号)
- 興亜教育に於ける体育文化の位置 (1巻12号)
- 在支那人子弟の教育を語る (2巻1号)
- 教育者と思想の問題 (2巻2号)
- 南と北 (2巻5号)
- 学制改革の諸問題 (2巻5号)
- 勤労青少年教育論 (2巻6号)
- 戦場より教場へ (2巻7号)
- 尊攘の道 (2巻8号)
- 教員養成機関の問題 (2巻10号)

本資料集掲載の大東亜教育論から何が見えてくるのか。アジア諸民族の植民地統治理念の探求であり、日本精神のアジア化ないしアジア諸民族の日本化・日本人化の追及。アジア植民地開発主義に依じる職業技術教育体制の構築の展望、そしてアジアにおける日本語の国語化ないし東亜共通語化の試み、等等。

大東亜教育論の担い手は、比較的若い層の研究者であったことにも気づく。彼らの多くは、戦後、ふたたび、教育学を創造しはじめた。戦前戦後の教育学の連続断絶（戦争責任）問題を生む、これは基本要因である。

大東亜教育論が西欧文明による単線型の発展史観を批判し、欧米帝国主義的植民地教育政策を糾弾した点も見落とせない。従来の欧米型近代教育学を批判し、その「観念性」「思弁性」を指摘し、東亜新秩序に根ざした「実際の教育学」構想を主張した。大東亜教育論は、アジア解放教育論（東亜の解放）を装ったのである。その理念と実際との矛盾、本資料ははしなくもこの矛盾をみせてくれる。

これら教育と教育学のアジア侵略への歩みは、まだ、ほとんど総括されていない。近代日本の教育と教育学はなにゆえ日本教育学や大東亜教育論に行き着いたのか、この点は、未解明だといっている。

戦後教育学において不問に付された重大問題、本資料集はこの問題解明を解く不可欠な資料集となるだろう。戦後教育学研究が行き着いた最後の姿を、私たちは真正面から見据えなくてはならない、そういう時代（二一世紀）がきたのだと思う。

# 占領下の東南アジア諸地域の 具体的教育状況を知る上では、 他に代え難い貴重な雑誌。

歴史教育の現実的基礎（2巻11号）  
在外邦人子弟の教育（2巻12号）  
少年兵育成の諸問題（3巻6号）  
科学技術の基本（3巻7号）  
教育国家の建設を語る（3巻9号）  
動員学徒座談会（3巻10号）  
行学一体について（3巻11号）

## ■ 論説・論文

興亜教育の二要項（伊藤延吉）（1巻1号）  
東亜新秩序建設と興亜教育（大蔵公望）（1巻1号）  
戦時下興亜教育の規模（檜崎浅太郎）（1巻1号）  
東亜教育の歴史的本則（志田延義）（1巻2号）  
師範教育の改革に就いて（後藤文夫）（1巻2号）  
興亜教育と国民学校（安藤義雄）（1巻2号）  
大東亜の教育体制（海後宗臣）（1巻4号）  
興亜の指導者教育論（吉田昇）（1巻6号）  
国防国家の教育体制（倉澤剛）（1巻6号）  
歴史を動かすもの（紀平正美）（1巻7号）  
大東亜共栄圏の言語問題（長沼直元）（1巻8号）  
大東亜教育建設の現段階（倉澤剛）（1巻9号）  
大東亜戦争と我が国民教育（平塚益徳）（1巻9号）  
思想戦の本質（寺田彌吉）（1巻11号）  
決戦下の興亜決戦教育（檜崎浅太郎）（2巻5号）（2巻5号）  
興亜教師論（羽田隆雄）（2巻5号）

# 「大東亜戦争」への教育及び教育学の積極的関わりを知る基礎資料

小沢有作

▼東京都立大学名誉教授

私はかつて『興亜教育』誌を何冊か入手し、読み、引用したことがある。(同誌一号の大蔵公望論文など)。そのときには、全巻にあたり、調べたいと思ったが、かなわぬ夢に終わった。それが今回、『教育維新』への改題以降の全巻を蒐集し、復刻することになった。なんともありがたいことだ。老書生にも新たな研究意欲が湧いてきた。

本誌は、いうまでもなく、「大東亜共栄圏」時代における日本帝国の教育の構造と教育学の論理を表したものである。「大東亜戦争」への教育及び教育学の積極的な協力ぶりを知らるために、欠かせぬ基礎資料である。私は二つの点で本誌に注目してきた。

一は「大東亜教育論」の言説を示していることである。昭和前期、アジア各地の教育を支配するために日本教育は何をなすべきかを論じ、その手立を立てる領域を「興亜教育」と称したが、本誌発行の期間はその最終時期にあたる。興亜教育論が大東亜教育論に伸び、同時に日本教育学が大東亜教育学に広がり、教育言説が大東亜教育論一色に収れんした。いわば日本植民地教育の絶頂期の言説にほかならない。その諸相をもっとも端的に表しているのが、本誌である。しかし、今になってみると、これらはアジア見損ないの壮大な教育学の記録になったというほかにない。侵略の教育言説は他者見損ないの記録に転じる。歴史は冷厳である。

二は、本誌にアジア教育侵略論を寄稿した教育学者のほとんどが、敗戦後、ただちに民主教育のオピニオンリーダーに転じたことである。石山修平、倉沢剛、安藤曉雄、海後勝雄ら東京高師系の教育学者。海後宗臣、平塚益徳、吉田昇、宮坂哲文ら東京大学教育学科系の教育学者。わが師・宗像誠也も寄稿している。私はこれら諸学者の戦後の民主教育論を学んで育った者であるので、これら諸学者はアジア見損ないと植民地教育支配の言説をどのように反省したうえで民主教育論を展開されたのであるうかという疑問が、あらためて生じる。半世紀前の論文が今蘇り、歴史に糾される。物書きはこわいものだ。

なお、『興亜教育』には前身がある。本誌は榑崎浅太郎(東京高師教授・教育学)が主宰する東亜教育協会の発行によるが、以前に、同名の雑誌を旅順師範学校の

- 稲垣満次郎の教育論(田中弥十郎) (2巻7号)
- 皇国の道と国民教育(野々村運市) (2巻8号)
- 塾的教育の精神(以村敏雄) (2巻8号)
- 師範教育の課題(志水義暉) (2巻9号)
- 塾教育と世界観陶冶(吉田昇) (2巻9号)
- 時局と国民教育(小林澄元) (2巻10号)
- 興亜と日本教育(乙竹岩造) (2巻11号)
- 金沢正志の教育論(塚本勝義) (2巻12号)
- 教育と人種問題(佐藤井岐雄) (3巻2号)
- 教育者と思想(海後宗臣) (3巻4号)
- 大和一致の教育政策(関口泰) (3巻9号)
- 大東亜への文教政策(海後勝雄) (3巻9号)
- 学徒の矜持・勤労者の矜持(宗像誠也) (3巻10号)
- 大東亜教育圏確立の着想(井上哲次郎) (3巻10号)
- 行学一体論(安藤堯雄) (3巻11号)
- 日本学校形態論(阿部仁三) (4巻1号)
- 中等教育の戦力化(梅根悟) (4巻9号)

## 植民地・占領地教育文化関係

- 支那に於ける教育への一考察(志水義暉) (1巻2号)
- 現地教育情況報告(満洲) (1巻3号)
- 満洲開拓青年義勇隊の教育(石山脩平) (1巻3号)
- 満洲国の教育文化(森田孝) (1巻3号) (1巻5号) (1巻6号) (1巻8号)
- 華北の教育事情と興亜読本(加藤将之) (1巻4号)
- 在滿邦人教育の現状(秋山真造) (1巻4号)
- 南方圏の教育文化―東印度編(伊藤良二) (1巻6号)
- 南方圏の教育文化―ビルマ編(久保健弥) (1巻7号)
- 共栄圏に於ける邦人教育の建設(坂井喚三) (1巻11号)
- 支那民族主義教育思想(小関紹夫) (2巻1号) (2巻6号)
- 満洲国の教育の現状(森田孝) (2巻9号)
- 南方占領地の教育文化工作(竹田光次) (2巻9号)
- 泰国留学生教育の諸問題(石丸優三) (2巻4号)
- 泰民族教育の基礎理論(渡辺知雄) (2巻5号)
- 蒙古民族教育文化論(内藤潮邦) (2巻7号) (2巻10号) (2巻11号)
- ビルマの教育(鈴木寛一) (2巻7号)
- 北支邦人教育の現況(大柴衛) (2巻12号)
- 朝鮮教育の概況(朝鮮総督府) (3巻1号)
- 中国教育文化活動の重々相(渡辺定則) (3巻2号) (3巻4号)



發刊の辭

畏くも大詔を拜して、大東亞戰爭に一億鐵火の熱戦を戦ひつゝある時、吾等また教育の職域より此の世界史的壯圖に参加して、本誌『興亞教育』を世に送り得ることは、衷心の欣快とする所である。思ふに興亞教育は日本教育の本義が、世界歴史の新展開に即して、具體的に顯現せる姿に他ならない。それは大義を八紘に宣揚し坤輿を一字たらしめんとする宏大無比の國民的世界觀に立脚して、先づ新しき大東亞の建設を、進んで道義世界の恒久平和確立を、その最も内面的根源的なる教育の分野に於て擔當せんとするものである。

吾等は斯かる重大使命に直面して、第一に國內の教育體制に深き省察を向け、眞實の永續的なる國防國家を教育國家の根基に於て培育せんことを念願すると共に、第二に視野を廣く東亞全般に擴大し、日滿華其他東亞諸國家の教育者が、大同團結、相提携し呼應して、研究を促進し論策を交換しつゝ、共通の大的目的に進せんことを期してゐる。

吾等は併し徒らに高遠なる理念のみを掲げて眼前足下の任務を等閑に附してはならない。常に現實の事態に肉迫し、生ける資料に結合して、具體的なる方策を考究し、同志相率ゐて歩一歩實踐の大道を踏みしめ行かんことを誓ふものである。

吾等は各界の達識權威の示教を仰ぎ、關係當局と密接に結合して、教育を國策に即應せしむることに萬全の努力を拂ふと共に、廣く學界の協力を求めて理論的考察の精緻ならんことを期し、更に普く實際教育界の支持に依據して成果實績的的確ならんことを希求してゐる。

本誌は斯くの如き意圖に基きて結成せられたる興亞教育協會を母胎として誕生したものである。本誌を通じて本協會の精神と活動とが表現せられ且助長せられつゝ、興亞教育そのものの振興に些か寄與することを得るならば、吾等の欣幸とする所である。茲に發刊の微意を披瀝して大方の支援を懇願する次第である。

昭和十七年一月一日

東亞教育協會

(26)



大東亞教育建設の現段階

倉澤剛

一 階段の現設建育教亞東大

南方の武力截定が概ね一段落を告げ、占領地の統治が本格的に進められるにつれ、諸般の建設とともに教育建設の問題が當面の日程に上つて來た。現地の教育工作にも各地各標の工夫が試みられ、中央の對南方教育方策もやうやく活潑化してゐるのは周知の事實である。われわれは南方文教政策の發進に當つて、改めて日滿支と南方とを包括する大東亞教育圏の性格と段階とを劃定してかゝる必要を

亞建設の基本理念によつて一貫的に規律せられ、かつ政治建設・經濟建設・軍事建設・思想文化建設などの建設諸方策と緊密に結合して、綜合的に運営せられるのでなければならぬ。

大東亞建設審議會は、昭和十七年五月四日、大東亞建設に關する基礎要件を確定し、これを諸方策決定の指針たらしめることとした。

大東亞建設の基本理念は我が國體の本義に淵源し、八紘爲宇の大義を治く大東亞に顯現するに在り、これがため各國および各住民をして其の分に應じ各よ其の所を得しめ、道義に立脚する新秩序を確立すを以て要となす。

基に  
大東  
亞建  
はち  
大東  
これに昭和十三年十一月三日、支那事變の新段階に入るに當つて設けられたいはゆる「東亞新秩序聲明」以來、わが國民の間に常態化せられた觀念であるが、このたびこれが大東亞建設審議會によつて大東亞建設の最高指針として答申せられ、政府によつて正式に國策として確定せられたところに歴史的な意義が認められなければならない

## 戦前教育科学運動史料

佐藤広美／高橋智編・解説 戦前の民間教育研究運動の最後の拠り所となった教育科学研究会の機関誌『教育科学研究』と山下徳治編集の『教材と児童学研究』を収録。総力戦体制下の民間教育運動の課題、状況を知る第一級の史料。

●全2巻 本体36,000円〔編集復刻版・A5判上製〕

## 教育科学

梶村光郎監修・解説 本誌は一九四七年、従来の観念や道徳としての教育研究から教育を科学として捉え創造することを目的に「教育科学研究会」が創刊。占領期における教育の諸課題を毎号特集形式で取り上げており、占領期教育史研究に好個の資料。

●全4巻・別冊1 予価68,000円〔復刻版・A5判上製・近刊〕

## 教育新聞

梶村光郎監修・解説 志垣寛主宰の本紙は、戦後いち早く発行された教育関係の新聞の一つ。教育新聞社より昭和20年から22年まで通算71号刊行された。戦後初期の教育状況を克明に報道した貴重な新聞。

●全1巻 本体26,000円〔復刻版・A4判上製〕

## 國語創造

梶村光郎監修・解説 志垣寛主宰の本誌は、戦後いち早く発行された国語教育雑誌。昭和21年から24年まで全13冊刊行され、戦後初期に推進された民主的な国語教育の状況を伝えた。戦後国語教育史研究・生活綴方教育史研究等に不可欠の文献。

●全2巻・別冊1 本体36,000円〔復刻版・A5判上製〕

## 資料日本の戦後教育改革

佐藤広美編・解説 本書料は『松本喜美子資料』の中核であるIFELの実態資料と神奈川の新教育の実践資料を中心に編纂。昭和20年代から30年代初めの戦後教育改革実施期における各種の解説書、報告書、会議記録など珠玉の史料満載。

●全5巻 本体100,000円〔編集復刻版・B5判上製〕

## 農村教育研究

小林千枝子監修・解説 大西五一を中心に下中弥三郎、江渡狄嶺、上田杏村など多数の教育実践家に参加した農村教育研究会の「研究雑誌」である。当時の政治・教育思想を知るための不可欠の文献。原本の所蔵機関はわずかで全巻揃いの所はない。

●全3巻・別冊1 本体57,000円〔復刻版・A5判上製〕

# 興亜教育

▼佐藤広美（東京家政学院大学助教） 監修・解説

▼東亜教育協会編

▼全39冊（昭和17年1月～昭和20年4月刊）

▼全8巻十別冊1（解説・総目次・執筆者索引）

▼A5判・総3500頁・上製クロス装・ケース入り

▼定価＝本体140,000円＋税 ISBN4-89774-506-3

（平成12年5月上旬一括刊行 分売不可）

## 本書の構成

### 1巻

1巻1号（17年1月）～1巻3号（17年3月）全3冊

### 2巻

1巻4号（17年4月）～1巻6号（17年6月）全3冊

### 3巻

1巻7号（17年7月）～1巻9号（17年9月）全3冊

### 4巻

1巻10号（17年10月）～1巻12号（17年12月）全3冊

### 5巻

2巻1号（18年1月）～2巻4号（18年4月）全4冊

### 6巻

2巻5号（18年5月）～2巻9号（18年9月）全5冊

### 7巻

2巻10号（18年10月）～3巻3号（19年3月）全6冊

8巻——3巻9号より『教育維新』に改題される

3巻4号（19年4月）～4巻4号（20年4月）全12冊

## ◆本誌の主要執筆陣（肩書は執筆当時のもの）

阿部仁三（陸軍省報道部嘱託）

安藤堯雄（東京高等師範学校助教）

石山脩平（東京高等師範学校教授）

伊東延吉（国民精神文化研究所長）

井上哲次郎

梅根 悟（川口中学校長）

大藏公望（東亜研究所副会長・貴族院議員）

乙竹岩造（東京文理科大学名誉教授）

小関紹夫（文部省思想課長）

海後勝雄

海後宗臣（東京帝国大学助教）

紀平正美（国民精神文化研究所事業部長）

倉澤 剛（東京女子高等師範学校助教）

後藤文夫（貴族院議員）

小林澄兄（慶応義塾大学教授）

志田延義（国民精神文化研究所員）

杉靖三郎（国民精神文化研究所員・医学博士）

関口 泰

寺田彌吉（日本学研究所主事）

永井柳太郎（内務大臣・大日本興亜同盟常務顧問）

榎崎浅太郎（東京文理科大学教授）

長沼直兄（文部省図書局嘱託）

橋田邦彦（文部大臣）

久松潜一（東京帝国大学教授）

平塚益徳（広島高等師範学校教授）

伏見猛彌（国民精神文化研究所員・教学錬成所錬成官）

増田幸一（文部省総務局教育調査課事務官）

宮坂哲文（東京帝国大学助手）

宗像誠也（大日本教育会教学動員部）

森田 孝（対滿事務局文部事務官）

守屋美都雄（国民精神文化研究所員）

安井てつ（東京女子大学名誉学長）

吉田熊次（東京帝国大学名誉教授）

吉田三郎（国民精神文化研究所員）

吉田昇（日本大学講師）

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

（下記の書店にお申込み下さい）

00.3.5:60